

新古今和歌集 「本歌取り」の手法

沙弥満誓が歌

世の中を何にたとへむ 朝開き 漕ぎいにし船の 跡なきがごと

【通釈】世の中を何に譬えたらよいだろう。朝早く港を漕ぎ出て行っ

た船の、航跡が残っていないようなものだ。

【主な派生歌】

世の中を何にたとへん秋の田をほのかにてらす宵の稲妻(源順〔後拾遺〕)

世の中を何にたとへん風ふけばゆくへもしらぬ峯のしら雲(リ〔続古今〕)

には照るや風ぎたる朝に見わたせば漕ぎゆく跡の波だにもなし(西行)

跡もなくこぎ行く船のみゆるかなすぎぬる事はこれにたとへん(慈円)

これも又なににたとへむ朝ぼらけ花ふく風のあとのしらなみ(鴨長明)

とほざかる人の心はうなばらの奥行くふねの跡のしら浪(藤原定家)

花さそふ比良の山風吹きにけりこぎゆく舟の跡みゆるまで(宮内卿〔新古今〕)

長忌寸奥麻呂(ながのいみきおきまろ)

苦しくも降り来る雨か 神の崎 狭野の渡りに家もあらなくに

【通釈】困ったことに降ってくる雨だ。三輪崎の佐野の渡し場には、雨をし  
のげる家もないのに。

【主な派生歌】

涙こそゆくへも知らね 三輪の崎 佐野の渡りの雨の夕暮(源実朝)

(訳)あてどなく涙が溢れてくる。三輪の崎の佐野の渡し場の雨の夕暮れ。

三輪の崎は新宮市三輪崎。佐野は新宮市佐野。

秋寒し佐野の渡りの小夜時雨 旅なる雁は家もあらなくに(再昌草)

(訳)秋は寒々とする。佐野の渡りの夜の時雨に旅する雁は家もないこと

だのになあ。

駒とめて袖打払ふかげもなし佐野のわたりの雪の夕ぐれ(藤原定家)

(訳)駒をとめて袖に積もる雪を振り払う物陰もない。さの渡し場の雪

の夕暮れよ。